

# 北海道林業の現状と展開方向について

北海道林業信用保証相談員

北海道森林組合連合会 総務指導部長 遠藤芳則

北海道は戦前、戦後と豊富な天然林資源を背景とした林業を主要な産業として、多くの地域が成り立っていましたが、昭和50年代後半を境として天然林の伐採量は減少し資源も枯渇し始めました。

この天然林に代わって北海道林業を支えたのは、戦後、炭鉱の坑木として利用されたカラマツと北海道の固有樹種であるトドマツ、アカエゾマ

ツ、そして北海道南部で植林されてきたスギなどの人工林材です。

北海道の人工林は戦後から本格的に造林が始められたこともあり、以前は間伐材の有効利用を中心として木材生産を行ってきましたが、近年は伐期を迎えた林分も多くなり本格的な利用期に入ってきました。



## 1 北海道林業の現状

北海道の森林面積は554万ha、森林率は71%、素材生産量は395万m<sup>3</sup>となっています。林種別では、人工林30%に対し天然林約70%と天然林面積が多くを占めていますが、直近5か年は人工林の伐採が約90%を占めており、人工林材中心の素材生産といえる状況です。

北海道産材の利用ですが、カラマツについては梱包材など産業用資材が8割程度占めていますが、トドマツ類は6割程度が羽柄材などの建築材として利用されているほか、従来カラマツ主体であった合板材利用がトドマツにも広がってきています。

また、近年はカラマツ・トドマツ・スギとも合板用及び製材用として、丸太の本州方面への移出及び近隣諸国への輸出も増加傾向にあります。

北海道の木材流通の特徴ですが、一部付加価値の高い原木以外市場売りはなく、山土場から工場へ直送されており、価格も需要者と供給者の相対で決められています。

こういった形態により流通コストの削減を図っ

ているほか、多種多様なサイズを樹種別に注文に合わせて供給することで需要者側の要求にえています。

北海道産材の需要の高まりにつれ伐採量も増加傾向にあることから、人工林資源の循環サイクルを確立するための再造林が重要となっており、北海道独自の再造林への助成も相まって1万haの伐採に対し人工林造林面積は9千haと資源循環が図られつつあります。



コンテナ苗を使用した植付作業

## 2 北海道産材利用の展開方向

北海道の人工林材が本格的な利用期に入ってきたことから、木材の付加価値を上げるための取組みが始まっています。

カラマツについては、産業用資材のほか、建築材の利用も進めています。

従来は、ねじれやヤニの問題をクリアし強度面の優位性を生かすために集成材として建築利用を促進してきましたが、これに加えて「コアドライ」というねじれを抑える乾燥技術が開発されたことから、無垢材として利用が可能となりました。

これまで集成材のみであったカラマツ建築材



集成材を利用した都市部での木造建築事務所  
(北海道森林組合連合会 札幌市中央区)



カラマツ コアドライを使用した大規模建築物  
(当麻町役場 議場)

の選択の幅が大きくなり、強度を生かした規模の大きな建築物への利用も拡がりを見せつつあります。

また、CLTの基準強度にJASの樹種群や等級区分に応じて、より高い強度が追加されたことからカラマツ・トドマツの強度を基準として活用可能となり、強い区分の樹種として構造用としての利用が期待されています。

都市部においてもカラマツ・トドマツ集成材やCLTを利用した中高層や大規模建築物での需要を拡大させるための取組みを始めています。

## 3 林業信用保証制度の活用

これまでの北海道産木材の利用を増やす取り組みから、最近では、付加価値をつけるための取組みが始まりましたが、これに対応した生産設備の拡充や増設、また大径化してきた木材を効率よく挽くことのできる工場設備などは現時点において充実しておらず、これから導入促進を図る必要があります。

また、少子高齢化により労働力が不足している造林現場は、IoTや自動化技術を取り入れて省力化を図るなど、北海道林業活性化に向けて林業信用保証制度を活用し、資金需要に応えることができるような制度設計をこれからも期待しております。